

いさかん



第 117 号

2023 年 6 月
日本野鳥の会三重
<http://miebird.org/>

ソリハシセイタカシギの観察



四日市市 今西 純一

1.はじめに

2022年12月から2023年1月末にかけて、三重県北勢地区の河川にて27羽のソリハシセイタカシギが滞在しました。初認は野鳥の会会員ではない知人で、ネットに情報も掲載されなかったため大騒ぎになることはありませんでした。私は2022/12/29に情報を得ましたが、実際に姿を確認しに行けたのは年が明けた2023/01/21でした。滞在期間を確認したかったので、その後は可能な限り確認しに行きましたが、私が最後に確認できたのが1/29でした。別の会員の方が確認されたのが1/31まで、2/1以降は確認されていないことから1/31で旅立ったものと思われます。

2.過去の最大カウントについて

環境省生物多様性センターのモニタリングサイ



27羽のソリハシセイタカシギ

目次

ソリハシセイタカシギの観察	2
表紙の言葉	2
木曽岬干拓地で久しぶりにチュウヒの繁殖行動	4
県下におけるフクロウ調査	5
三重県で越冬が確認されたシマクイナ	6
鳥みる私の今昔	9
熊野地方で見られる野鳥	10
紀伊長島大島でドブネズミ駆除始まる	12
紀北町の海でカンムリウミスズメ調査	14
鈴鹿市、入道ヶ岳	15
猪名部神社 アオバズクの記録	16
シギ・チドリ類の年齢・季節による羽衣の変化	
—連載第32回 ソリハシセイタカシギとレンカケ—	18
野鳥記録	24
理事会報告	28
事務局だより	28
探鳥会予告（2023年7月～10月）	29
探鳥会報告（2023年1月～2023年3月）	29
編集後記	32
*ほのぼの鳥さん watching は都合により今回休載させていただきました。	

ト1000で閲覧可能な「シギ・チドリ類：個体数調査」によると2019/01/27に沖縄県豊見城市字与根の第一遊水池（通称、三角池）にて21羽がカウントされているようで、私が調べた限りではこれが国内の最大カウントだと思われます。今回の27羽は過去最大となる可能性が高そうです。

3. 埠と餌場について

ソリハシセイタカシギが埠とした場所は河川の堤防から人が歩いて入れる場所になっていました

表紙の言葉

セグロカモメ

津市 平井 正志

津周辺の砂浜は春と秋、セグロカモメとユリカモメの大群に占領される。このセグロカモメはユリカモメより、ひとり大きい。海の鳥ではあるが、陸地から遠く離れた外洋にはあまり出ない。漁船の捨てた魚を漁るなど、何かと人との接点が多い。やさしいイメージのあるカモメだが、目を見るとけっこうきつい。近縁のオオセグロカモメは北海道などで繁殖するが、セグロカモメは遠く大陸北部、北極海沿岸で繁殖する。成熟するまで4年ほどかかるようである。



泳いで近づいてくる



採餌中

(立ち入りは禁止ですが)。近づく人がほとんどいなかったためか、人への警戒心は薄かったように思います。私が座って観察していると泳いで近づいて来たり、採餌の際にはカメラからはみ出すほどの距離まで近寄ってきました。

餌場は磯のすぐ横で、干潮になると川底が見えるところです。採餌の様子を観察していると、次々と何かを食べているようで、かなり食べ物が豊富な様子がうかがえました。(何を食べているかは確認できませんでしたが、水生生物か小さな貝のようなものを食べているように見えました)

ただしこの場所はかなり猛禽類が多く、私が観察しただけでもハヤブサ、ハイタカ、チョウゲンボウ、ノスリ、ミサゴ、チュウヒ、トビと7種確認できました。ソリハシセイタカシギは猛禽を見つけると群れで飛んで逃げ惑い、かなり遠くまで飛んでいってはまた磯に戻ってくるということを何度も繰り返していました。ハヤブサが現れたときには見えなくなる場所まで飛んでいって長時間戻ってきませんでした。

それでもこの場所に戻ってきていたということは、よほど採餌の条件が良かったのではないかと思います。なお私が観察した限りですがこの採餌場所では毎回ズグロカモメを観察しました。



ハヤブサ（右下）の襲撃



バタバタと羽ばたく

4. 行動と識別について

観察できた行動は以下の通りです。

- ・磯で寝ている
- ・川で浮いておりある程度下流に流されると飛んで磯付近に戻る
- ・採餌をしている
- ・水浴びや羽繕いをしている
- ・猛禽に驚いて逃げ惑いその後磯に戻る
(ハヤブサの場合は戻らない)

足のつかない深い場所でも上手に泳いでいましたが、足を撮影して納得しました。立派な蹠（みずかき）がついています。私が毎年観察している鈴鹿市のセイタカシギもまれに泳ぎますが、蹠は極小さいものであるため積極的に泳ごうとはしません。一方、ソリハシセイタカシギはかなり積極的に泳ぐ傾向にありました。姿形だけでなく採餌方法も似ている両者でなぜ蹠に大きな違いがあるのか不思議です。

成鳥と第1回冬羽の識別は詳しくできませんが、頭部以外の黒色部分に褐色の目立つ個体や、頭の黒色部分が薄い個体がいました。これらは第1回冬羽なのではと思います。褐色に感じる部分がほとんどない個体が恐らく成鳥なのでしょう。



蹠（みずかき）の形状

5. おわりに

ソリハシセイタカシギは近年各地で確認されることが増えているように思います。2022/10/30には鈴鹿川でも観察され、7日間滞在しています（しろちどり第116号より）。今後、ミヤコドリのように越冬するのが当たり前の種になるかもしれません。その先駆けとなるかもしれない今回の滞在を確認することが出来て幸運でした。初認された知人や情報管理をしていただいた方々に、この場を借りてお礼申し上げます。

日付	観察事項	コメント
2022/12/25	27羽確認（知人）	初認
2022/12/29	確認できず（知人）	
2023/1/1	16羽確認（知人）	
2023/1/3	26羽確認（知人）	
2023/1/7	確認（知人）	
2023/1/8	確認（知人）	
2023/1/9	確認（知人）	
2023/1/14	確認（知人）	
2023/1/15	確認（知人）	
2023/1/17	27羽確認（家族）	
2023/1/21	27羽確認（自分）	
2023/1/22	確認（知人）	
2023/1/28	27羽確認（自分）	
2023/1/29	27羽確認（自分）	
2023/1/30	確認（会員）	
2023/1/31	確認（会員）	おそらく終認
2023/2/1	確認できず（会員）	
2023/2/2	確認できず（家族）	
2023/2/3	確認できず（自分）	
2023/2/4	確認できず（知人）	
2023/2/6	確認できず（家族）	
2023/2/11	確認できず（知人）	

2023年1月4日に知り合いの会員の方から連絡があり確認にいきました。全国的に見ても異例の個体数でしたので、徹底的に情報を管理いたしました。幸いこの場所は釣り人や散歩の方しか来なかったため、ほとんど知られることもなく、無事に旅立ってくれました。

観察していると疑似交尾の様子も見られて、これまでの単独で飛来する個体では見られない行動が興味深かったです。

（野鳥記録担当 笹間 俊秋）



疑似交尾の様子

木曽岬干拓地で久しぶりにチュウヒの繁殖行動

保護部 近藤 義孝（桑名市）



木曽岬干拓地のチュウヒはこの2年、繁殖行動が見られませんでした。しかし、今年2023年4月15日には巣材運び、ディスプレイが見されました（表）。ひさしぶりのヒナの誕生が期待されます。しかし、三重県はこの干拓地をさらに開発することをめざして第二期の開発事業の環境影響評価を行っています。私たち、野鳥の会三重、日本野鳥の会愛知県支部、公益財団法人日本野鳥の会の連名

で、2021年2月1日に木曽岬干拓地のさらなる開発を中止するよう三重県に申し入れています（詳しくはしろちどり108号）。しかし、残念ながら環境影響評価が続けられ、現在準備書作成の段階になっています。この第二期の開発が行われればチュウヒの繁殖は絶望的です。また、冬季、干拓地はチュウヒのねぐらとして利用されていますが、それも消滅するでしょう。

チュウヒの繁殖状況

下の表1に示すように2004年までは3つがいが繁殖を試み、2011年までは2つがいが繁殖を試み、それ以降は営巣数が1つがい以下でした。2022年まで3年間はまったく繁殖が成功しない状況です。今年に入って、1つがいのチュウヒが繁殖を試みています。成功すれば4年ぶりの干拓地内での繁殖となります。

表1 木曽岬干拓地でのチュウヒの繁殖状況

年	2002	2003	2004	2005	2006	2007
営巣数	3	3	3	2	2	2
繁殖成功巣数	0	3	2	1	1	1
巣立った幼鳥	0	3	2	2	1	1



2023年 チュウヒの繁殖行動

年	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
営巣数	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	1
繁殖成功巣数	1	2	0	0	0	1	1	1	1	0	0	1	0	0	0	?
巣立った幼鳥	3	6	0	0	0	3	2	4	3	0	0	1	0	0	0	?

県下におけるフクロウ調査



津市 平井 正志

当会は2016年から県内各地でフクロウの巣箱をかけてきた。長年のフクロウの繁殖を観察してきた会員からの情報によると、以前は繁殖が見られましたが、その後、繁殖が見られなくなった場所がいくつもある。周囲の環境が大きく変化したわけではないので、巣穴の条件の悪化、環境整備による営巣木の伐採・自然倒木・老木による営巣木が自然災害・倒壊などしたり、大木が減って樹洞が無くなつたことが原因と推定される。

例外なくフクロウも自然環境に適応した場所に営巣するため巣箱も当然利用条件に合わせ設置してきたが位置情報管理にも神経をつかわなくてはならない。また、巣箱は木の上などに掛けるため、高所作業を必要とされ、設置場所は限定される。これまで、合計9個を架けた。そのうち、3個は利用されず、すでに撤去したので現在6個が架かっている。今年(2023年)、現在架かっている巣箱6個の全てでフクロウ利用が確認された。うち3個は今年新たに利用が確認されたものである。また最も高頻度で利用されている巣箱は2016年に掛けられたもので、2018年から毎年、1羽ないし2羽のヒナが巣立っていて、今年も利用が確認されている。これらの巣のヒナが巣立ちまで無事育つかどうか、何羽のヒナが巣立つかは今後の観察である程度わかるであろう。

当会の取り組み全体ではなんと9個のうち6個が利用されたという、高い利用率になった。フクロウの巣箱がこのように高頻度で利用されるということは、それだけ、県内の自然の樹洞などの営巣場所が減っていることの証拠であろう。空洞のある巨木は自然に倒れることもある。また、特に人の出入りする場所のものは倒木の危険性があるので、倒れる前に伐採されることも多い。フクロウは他の鳥類とは異なり、巣を自分で作る、あるいは巣材を運ぶことは一切しないと云われるが営巣木がない場合稀にカラスの古巣を利用したり、簡単な枝を集めゴミが木に引っかかっているような巣?で営巣記録もある。また、山間部のほとんど人が利用しない廃墟や小屋なども使うが、半面民家の裏山などでの繁殖例は多く夜行動するフクロウは人目に触れないでの、近所で繁殖していてもほとんど知られていない。一般的に自然樹洞の利用が圧倒的に多く樹洞の底が深く穴が掘れてなく皿巣でも結構利用する。

フクロウが繁殖するのに巣箱を必要とする場所は県内にまだまだあるが自分の周りの住んでいる環境を知り鳴き声を観察すればもっと手掛かりが得られるはずである。

今後も巣箱を増やしてゆきたい。会員諸子の情報提供、協力を乞う。

三重県で越冬が確認されたシマクイナ



長野県 松宮 裕秋

皆さん、シマクイナという鳥をご存知でしょうか？シマクイナは極東だけに分布する世界最小のクイナの仲間です。その観察の難しさから、これまで分布や生息状況、生態に至るまで、ほとんどのことが分かっていない謎多き鳥でした。近年の調査で、国内の生息状況が解明されつつあり、三重県でも越冬していることが確認されました。

今回は、発見の経緯や生息地の特徴、そしてシマクイナが直面する脅威について紹介します。

幻の鳥 シマクイナ

シマクイナは、極東ロシアから中国北東部と北日本の一帯で繁殖し、日本や朝鮮半島から中国南東部にかけて越冬するクイナ科の鳥です（写真1）。その大きさはクイナの仲間では最も小さく、スズメよりひと回り大きい程度しかありません。

日本では戦前から各地で記録があり、国内での繁殖や越冬が示唆されていました。しかしながら、後述のように姿を見ることが非常に稀なため、近年になるまで生息の実態すら分かっていませんでした。確認の難しさはその形態と習性によります。体が小さく、目立たない模様をしているうえに、植物の茂った湿地に生息し、開けた場所へは出ず、草の中を歩いて活動するため、姿を観認できる機会がほとんどありません。さらに唯一の手掛かりとなり得る鳴き声も最近までよく分かっていませんでした。そのあまりの見にくさ故に、出会うには宝くじを当てるような偶然性に頼るほかなく、とあるベテランバーダーは「見てしまうと命が危ない」と言ったほどです。



写真1. シマクイナ

世界的に見ても、ロシアで1906年に巣が見つかってから、2016年に卵の殻が発見されるまでの110年もの間、繁殖に繋がる手掛かりがなく、詳しい繁殖地すら知られていなかった「幻の鳥」でした。そんな幻の鳥ですが、ここ10年ほどの間に、情熱的な研究者やバードウォッチャーらの手によって、日本での生息状況が徐々に明らかになっています。2018年、19年には関東地方での越冬状況を示した論文が続けて発表され、2020年には北海道における国内で初めての繁殖が報告されました（繁殖の確認そのものは2018年で、雛の撮影は世界初とのことです）。2021年には九州北部でも越冬期の生息が報告されています。

シマクイナを発見！

私がシマクイナを探し始めたのは、関東で越冬していることを知ったのがきっかけです。関東にいるなら、その隣の中部地方にもいるはず！と思い、まずは馴染みのフィールドの中から候補地を絞り、静岡県のとある湿地で探すことになりました。

2020年1月のある日、私のシマクイナ探しが始まりました。クイナ類は姿が見づらい鳥ですが、明け方と夕方によく鳴く時間があるため、その時間に湿地の周囲を歩いて耳をすまします。しかし、聞こえてくるのはよく似たヒクイナの声ばかりで、お目当ての声は聞こえません。日も完全に落ち、さすがにそう簡単には見つからないかと諦めかけたとき、何度も予習した声が聞こえました。シマクイナでした。聞き間違ではないかと思いながらしばらく待っていると、再び同じ鳴き声が聞こえ、今度は録音することもできました。その後、声紋を確認（※）することで、この声は確実にシマクイナのものであることが分かり、静岡県では実に27年ぶりの記録となりました（図1）。

このときは「やっぱりいた！」という達成感と、「本当にいるなんて！」という驚きの気持ちが入りまじり、とても興奮したことを覚えています。姿までは確認できませんでしたが、すっかりこの鳥の魅力に取りつかれてしまいました。（その後、静岡では他の場所でも生息を確認し、継続して越冬していることも分かりました。）

※ヒクイナとシマクイナの地鳴きは共に「キュルルル」と聞こえ、聞き分けが難しいですが、シマクイ

ナは声が小さくて短い傾向があることや、一音目が強く二音目以降は急激に尻下がりになることなどで識別できます。鳴き声の違いは福田ほか(2019)に詳しく紹介されていますので、興味のある方は検索してみてください。

三重県での調査

静岡での成果に気をよくした私は、続いて生まれ育った近畿地方で調査をすることにしました。はじめは琵琶湖周辺や大阪～兵庫などの平野部に狙いを定めましたが、意外にもいそうな環境がほとんどなく、期待薄でした。

そんな折、何気なく伊勢志摩や紀伊半島の航空写真を見ていたとき、山と海の間に湿地が点在していることに気づきました。これまで知られているシマクイナの生息地はいずれも平野部のヨシ原がほとんどでしたが、「この湿地にはシマクイナがいそう!」という予感と自信がありました。そこで、兼ねてから計画していた紀伊半島周遊旅行に合わせて調査を行うことにしました。

シマクイナの調査は主に鳴き声の確認によって行われます。通常の探鳥では自然に鳴くのを待ちますが、調査では精度を高める必要があるため、音声を playback して、その反応を調べます。調査にあたっては、事前に航空写真などで生息している場所の目星をつけました。そしてピックアップした伊勢市以南の 11か所で 2021～22年の冬に調査を行い、そのうちの 5か所で少なくとも 21羽の生息を確認しました。2022～23年の冬にも 20羽以上の生息を確認し、三重県が定期的な越冬地であることが分かりました。また、古い記録を調べたところ、1940年に伊勢市で採集された標本があることが分かりました。このことから、シマクイナは昔から人知れず渡来していたことが伺えます。

特殊な生息環境

調査の結果、三重県のシマクイナは水田の耕作放棄後にヨシなどが生えてできた湿地環境に生息することが分かってきました(写真 2)。ただし、どんな耕作放棄地でも良いわけではなく、地面に湿り気があり、下層植生が発達している(カサスゲやチゴザサなどの背の低い草が豊富に茂っている)場所が良いようです(写真 3)。クイナやヒクイナとは異なり、ヨシが大きくなったり、ヨシばかりが茂ったりした場所では見られません。この傾向は他地域でも同様です。一般的に、耕作放棄地は時間が経つにつれて遷移が進み、乾燥したり、大きなヨシやセイタカアワダチソウの群落に変わっていくことが多く、

シマクイナの生息地となり得るのは一時的である可能性があります。しかし、今回の調査で見つかった生息地は、耕作放棄後 20～40 年以上経った場所が多く、生息に適した環境が長年保たれていると考えられました。遷移が進まない要因は、区画整備の有無や、山地から流れてくる地下水の水位や水温などが関係しているようですが、はっきりしたことは分からず今後の課題です。このような場所は全国的に多くはないため、三重県はシマクイナの重要な越冬地であるといえるでしょう。

直面する脅威

各地の生息状況が分かるとともに、生息に適した環境は多くないことが分かってきました。2023 年現在、シマクイナは絶滅のおそれのある種として、環境省のレッドリストで絶滅危惧 I B 類に選定されており、さらに種の保存法による国内希少野生動植物種にも指定されています。

シマクイナの調査を進める中では、他にも様々な希少な鳥に出会いました。シマクイナと同様に国内

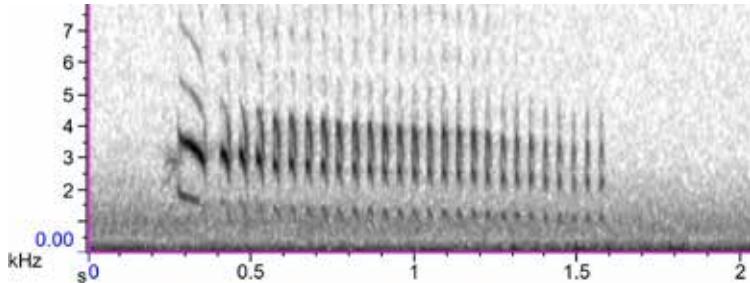


図 1 シマクイナの鳴き声の声紋



写真 2 シマクイナが生息する耕作放棄地

希少野生動植物種であるチュウヒにオオセッカ、個体数が減少しているサンカノゴイやタマシギ、生態系の上位に位置するコウノトリやトラフズクなどです（写真4）。このことから、シマクイナが生息する耕作放棄地は、他の希少な鳥にとっても重要な場所であることが推測されました。

しかし、シマクイナが好むような小規模な湿地や耕作放棄地は、開発に晒されることが多く、実際に今回の調査で確認した生息地のうち志摩市の1か所では、2023年の冬に湿地が埋め立てられ、生息環境が失われてしまいました（おそらく太陽光発電施設の建設と思われます、写真5）。本種の生息環境は特異的であり、周囲に似たような湿地があっても、特定の湿地にだけピンポイントで生息していることもあります。そのため、小規模な湿地の開発であっても、生息適地の喪失に直結する恐れがあります。



写真3 生息地の下層植生



写真4 サンカノゴイ（撮影は県外）

私が調査したのはごく一部の湿地であるため、まだ誰にも知られていない生息地があると思われます。小規模な開発では環境アセスメントも行われないことから、人知れず失われている生息地は想像以上に多いのではないかでしょうか。今後は、これまで生息が確認されていない場所を含めて、生息状況を把握し、開発による生息地喪失の影響を適切に評価することが強く望まれます。

参考文献

福田篤徳・小田谷嘉弥・白川浩一・白川浩子・小澤重雄・今井光雄・深川正夫・梅垣佑介・山口恭弘（2019）茨城県におけるシマクイナの生息状況 .Bird Research 15: A1-A14.

北沢宗大・吉岡俊朗（2021）九州北部におけるシマクイナの越冬を示唆する記録 .Bird Research 17: S13-S18.

松宮裕秋・沼野正博（2022）中部地方および近畿地方の太平洋岸地域におけるシマクイナの越冬状況 .Bird Research 18: A87-A97.

Senzaki, M, Kitazawa, M, Sadakuni, T & Takahashi, M (2020) Breeding evidence of the vulnerable Swinhoe's Rail (*Coturnicops exquisitus*) in Japan. Wilson Journal of Ornithology 132: 711-717.

高橋雅雄・蛇名純一・宮彰男・磯貝和秀・古山隆・高田哲良・堀越雅晴・大江千尋・叶内拓哉（2018）関東地方におけるシマクイナ *Coturnicops exquisitus* の冬季の生息状況 . 日本鳥学会誌 67: 109-116.

著者の松宮氏は当会会員ではありませんが、特にお願いして寄稿していただきました。（編集部）

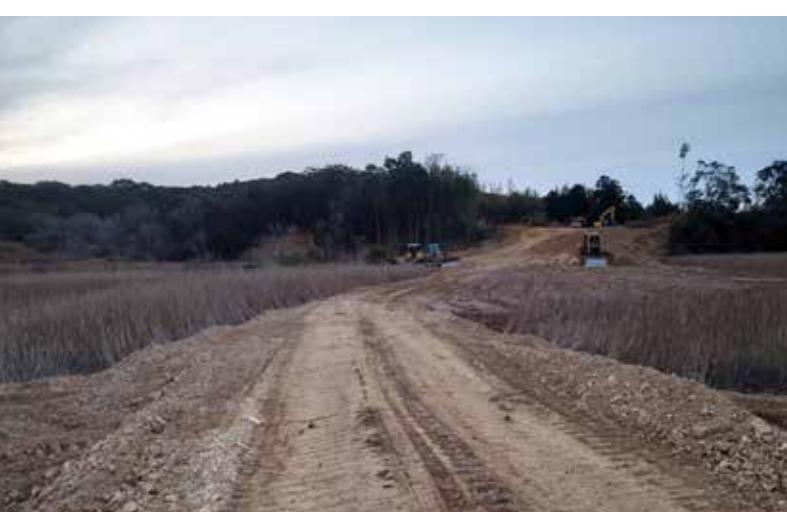


写真5 埋め立てられた湿地

鳥みる私の今昔



四日市市 岡崎 かおり

人生初の『鳥』って何だったか思い出せますか？私の記憶に残るのは、たくさん飼っていた小鳥たちです。ジュウシマツ・セキセイインコ・ブンチョウ・メジロ…両親が生き物好きだったためか、犬猫魚類に昆虫やカタツムリまでも飼っていたことがあります。私も小学生の頃には、自力でヒヨコからニワトリまで育て上げたり、小鳥を手乗りにしたりと、鳥の世話を何度も経験しました。そのためか、鳥を触ることに抵抗がありません。今でも、家庭菜園の網に絡まるヒヨドリやムクドリを確保しては逃がすことがあります。



キジ

さて、私が野鳥に興味を持つきっかけになったのは、娘が入学する前にした学校までのお花見散歩でした。下の子が『なんかおる！』と体育館の裏に走りだしたので、反対側から子と合流しようとすると、バサバサッと飛んで行ったのは、目に鮮やかな雄キジだったので。こんな身近に昔話でしか知らないかったキジがいるなんて！

でも、驚きは入学後も続きました。授業参観の折りに外を見たら、木に縦になって止まる鳥…しかも木をつづいてる！何だろう？別の参観では、小さくて可愛らしい鳥が逆さにぶら下がったりして！今ならば、それがコゲラやエナガだと分かりますが、当時は、何か分からぬ鳥が、身近に多い地域だなという感想でした。分かりやすかったのは、通学路の川沿いによく居て、ダイビングを見せてくれるカワセミでした。子どもたちには、いつも見かけるスズメと同じくらい珍しくない鳥という扱いをされていたのを覚えています。

その当時、自然観察会に参加していた知人が身近にいる野鳥について教えてくれました。そのおかげで少しづつ野鳥を覚えることができました。やがて、子どもが大きくなると、自分で観察会に参加し続けていました。その後、地元の自然保護推進委員会に誘われたり、海岸清掃ボランティアに参加したりと自然に関わる活動の場は広がりつつあります。

野鳥について、それまでより深く関わる転機となったのは、一連のコロナ感染症に伴う世の中の動きにありました。団体活動は制限され、参加できるイベントはほとんどなくなりました。個人での観察では限界を感じていた私が野鳥の会に入会したのもその頃です。また、同時に自然観察アプリに参加して、自分だけの生き物コレクション（記録として活用）も始めました。

始めて見ると、県内だけでなく、国内の情報が閲覧できるので、基礎的な鳥の知識が増えました。また、近隣であれば、存在を教えてもらって現地に出かけて観察した鳥や、自力で見つけることができた鳥の種類も随分と増えました。

観察を始めてから現在まで20年以上経ちました。自分の住んでいる地域内には川や田畠、里山があります。そこで私が存在を確認した鳥（中には鳴き声だけもありますが）を図鑑にマークしながら数えてみました。その数は、驚いたことに79種になりました。次は、どんな鳥に出会えるのか、また、これまで出会った鳥たちではどんな生態シーンが見られるのか、まだまだ興味は尽きません。ふらっと出かける観察散歩や探鳥会で、何が見られるのか…そして、野鳥の会の仲間にばったり出会うのも楽しみにしています。



ワナガ

熊野地方で見られる野鳥



熊野市 沢本 浩志

私は、1年半前に大阪から家内の里の熊野に引っ越してきました。野鳥の会三重の東紀州地区長故中井氏とは以前から親交があり、帰省した折には家内と3人で探鳥し、野鳥の生態などを教えていただきました。ご存命であれば、勉強させていただくことがたくさんあり、楽しい時間を過ごせたと思うと非常に残念です。

熊野地方は三重県の最南端に位置し、気候が温暖で、海から山までの距離が短く、川には葦が一面に広がり、背後には田園が広がります。車で15分ほど走らせれば溪流があり、四季とりどりの野鳥が見られます。



ミソサザイ



御浜町の葦原

春、田んぼに水が入ると、セイタカシギ、タカブシギ、ウズラシギ、ムナグロ、コチドリなどのシギ、チドリが見られます。毎年オオジシギやタシギも入り、クサシギもたまに見かけます。車から降りずに見ると近くまで寄ってきます。ただ、北部や中部に比べ、南部は干潟が少なく、シギ、チドリの数は少ない気がします。

また、キジとコジュケイの鳴き声も頻繁に聞こえ、イソヒヨドリやウグイス、ホオジロ、空ではヒバリが囀りだすと春本番を迎えます。川ではミソサザイが大きな鳴き声でさえずります。春の一時期、たくさんのアマツバメが平地で見られます。イワツバメは、橋桁の下の巣の修繕に忙しそうです。イソヒヨドリは非常に多く、綺麗な囀りがあちこちで聞こえます。ただ人家の近くで巣を作り、子育ての時期になると攻撃的になり注意が必要です。

当地ではタカ類也非常に多く、トビ、ノスリ、ミサゴ、オオタカ、ハイタカ、ハヤブサ、チョウゲンボウ、ツミ、クマタカ、時にはハチクマ、ハイイロチュウヒなどが見られます。また、チゴハヤブサは毎年秋に見られます。



御浜町下市木

初夏になると、葦原ではセッカ、オオヨシキリが騒がしく鳴き出します。田んぼにトラクターが入ると、その後をアマサギ、チュウサギ、コサギなどが後を追いかけ、掘り返された虫を食べます。また山麓では、オオルリ、キビタキ、クロツグミが高らかに囀り、アカショウビンの声も遠くで聞こえます。

秋から冬にかけては、タヒバリがかなり見られ、時にはムネアカタヒバリも混じります。他には、カワラヒワ、ホオジロ、カシラダカ、ホオアカ、モズ、オオジュリン、ヒメアマツバメなどが見られ、神社の針葉樹林には、ヤマガラやシジュウカラ、コゲラの混群に交じってキバシリも見られます。



ヤマドリ

また、毎年ムクドリの中にコムクドリが入り、ギンムクドリ、カラムクドリ、ホシムクドリが見られ、過去には、バライロムクドリ、シベリアムクドリも来た事があります。ナベコウも毎年来ているようです。一昨年は御浜町で見かけました。葦原では、オオセッカが越冬するようです。私はまだ写真に収める事ができていませんが、囀りと姿は見かけました。池では、カツブリ、カルガモ、コガモ、ハシビロガモ、ヨシガモ、マガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、オオバンなどが羽根を休めています。カワガラスは、上流から中流に生息する鳥ですが、下流でも見ることがあり個体数は多いです。山道ではヤマドリを時々見かけます。

夜になると、フクロウの鳴き声が聞こえ、小学校の窓にはオオコノハズクが窓にぶつかり保護されることがあります。以前はコノハズクやゴイサギの声が聞こえましたが、最近では全く聞かなくなりました。

過去には、ムジセッカ、ツメナガセキレイ、マミジロツメナガセキレイ、シマアオジ、ヤドリギツグミ、コウライアイサ、ヤツガシラ、タカサゴモズ、タイワンハクセキレイなどが入った事もあるようです。ただ、長居はしてくれないので辛いところです。

三重県南部地方は、野鳥観察の方が少なく、珍鳥が入っても見逃している可能性があります。観察会も行っていますので是非ご参加ください。



カワガラス



ナベコウ

紀伊長島大島でドブネズミ駆除始まる



津市 平井 正志

三重県紀北町、紀伊長島の沖合にはいくつかの離島があり、その中の最大の大島は約 9.8 ヘクタールの無人島で、全島がタブノキ等の照葉樹林で覆われ、ハマユウ、オオタニワタリが自生するなど顕著な特徴があり、国の天然記念物に指定されている（写真 1）。また、カラスバトが周年棲息し、オオミズナギドリの繁殖地でもある。大島を含む周辺の海域、離島は国設の鳥獣保護区となっている（しろちどり 79 号 80 号参照）。オオミズナギドリは日本の周辺の離島で繁殖する大型の海鳥で、夏に繁殖地の島に飛来し、地面の穴の中に卵を生み、ヒナを育てる、たいへん長寿な鳥である（写真 2）（しろちどり 104 号参照）。しかし、近年は島内にドブネズミが侵入、棲息し、ヒナや卵を捕食するなど、大きな影響を与えていていると考えられる（しろちどり 107 号参照）。

環境省中部地方環境事務所では、この島でオオミズナギドリの保護をめざして、種々の取り組みを進めている。その中でベイトステーション（餌箱）を設置し、毒餌をドブネズミに食べさせる手法を検討してきた。これまでに市販のドブネズミ駆除用の餌箱に、ネズミに対する誘引効果を高め、かつ、中の有毒餌が外に漏れないように等、種々の改良を加えた。2022 年夏、6 月から 9 月には餌箱法の安全性を確かめるため、無毒のエサをいれた餌箱を島内に設置

し、ドブネズミがエサを食べ、カラスバトなどがそのエサを食べず、エサが外へ漏れ出さない等の安全性を確認した。餌箱のエサは途中 2 回取り替えた。この期間、14 台のカメラを島内に設置し、動画を撮影し、ドブネズミの動きなどを観察した。エサを取り替えると、最初に餌箱を設置した時とほぼ同数のネズミが撮影された。ネズミの数は減少しなかった（図 1）。



写真 2 繁殖地へ降りたオオミズナギドリ（京都府冠島にて）



写真 1 紀北町 大島

その結果を元に、さらに、2023 年 1 月から 2 月にかけて、島内に毒餌を入れた餌箱 20 個を設置した。途中で 1 回ドブネズミが食べたエサの量を測定し、エサを新しいエサに取り替えた。また、2022 年夏の試験と同じように島内に 11 台のカメラを設置した。動画を撮影した。その結果、図 2 のようにエサを取り替えた後（矢印）では撮影されたネズミの数が明らかに減少し、毒餌の効果を示していると考えられた。また、カラスバトなど鳥類は餌箱周辺で多数撮影されているものの、毒餌を食べる様子は観察されず、安全性も確認された。



なお、使用した殺鼠剤は「ヤソヂオン」であり、一般に市販され、広く農耕地などで利用されているものであり、使用に特別の許可はいらない。今回の結果ではオオミズナギドリに対するドブネズミの害を低減することが期待できることが確認された。また、他の鳥類への安全性もほぼ確認された。

ドブネズミは外来の動物であり、世界各地で、地上、特に離島で営巣する鳥類に悪影響をおよぼしている。すでに日本周辺の離島の多くに侵入していると考えられる。また、今回の結果は京都府冠島(37.5ヘクタール)などドブネズミによるオオミズナギドリ繁殖が影響を受けている島々にも利用できるであろう。今後この毒餌によるドブネズミの減少がオオミズナギドリの繁殖にどれくらい有利になるのか明らかにする必要がある。

なお、この事業は環境省の請負業務として、株式

会社野生動物保護管理事務所（八王子市）によって行われている。

補足：カメラで撮影されたドブネズミは個体識別されていないので、同一個体を何度も撮影された可能性があり、正確に生息頭数を反映するとは言い難い。しかし、生息頭数の指標としては有効であろう。また、島内で毒餌の効果とみられる死体は発見されなかった。巣穴の中で死んでいる可能性が高い。毒餌の致死量から換算すると210頭分に相当する毒餌が食べられている計算になるという。

謝辞：この稿をまとめるにあたり、環境省中部環境事務所の協力に謝意を表す。

また、株式会社野生動物保護管理事務所 加藤洋氏の協力を得たので、ここに謝意を表す。

紀北町の海でカンムリウミスズメ調査



桑名市 近藤 義孝

現在、三重県では2025年のレッドデータブック改定に向けて様々な生物を10のグループに分けて調査を行っています。私たち鳥類部会は会員5名で調査・評価を担当しています。

今回のRDBの基礎になるデータとしては、日本野鳥の会三重の探鳥会やガンカモ調査、シギチドリ調査、ミヤコドリ調査、木曽岬干拓地立ち入り調査、モニタリングサイト1000、野鳥記録など約50000件のデータがありました。しかし、残念ながら海上や山での記録はありません。

2023年3月17日、部会のメンバー3名と調査協力者3名の6名でチャーターした船で紀北町紀伊長島の沿岸を右記の図のように航行し、調査しました。主な目的はカンムリウミスズメの生息確認です。船は紀伊長島海野を出港し、耳穴島周辺にむかいます。その後、大島および沖合の岩礁、佐波留島周辺を経て、二又島周辺にたちより、出港地に帰りました。

当日は曇天でほぼ無風、波の高さも0.5m以下の穏やかな日でした。調査で確認された種は表のとおりです。スタートの陸地（海野）や途中の島で観察できた鳥類も含まれています。カンムリウミスズメは18羽を確認しました。

紀北町紀伊長島には、会誌「しろちどり79号」、「しろちどり80号」にもあるようにカンムリウミスズメ、カラスバト、ウチヤマセンニュウなどの絶滅危惧種がたくさん生息しています。同じく「シロチドリ80号」には、この海域での鳥類調査の先駆者である倉田篤氏について平井正志代表が紹介しています。以下は「しろちどり80号」の一部です。



表 確認された鳥類と個体数

カンムリカツブリ	30
ヒメウ	16
ウミウ	30
アオサギ	1
クロサギ	1
セグロカモメ	10
カンムリウミスズメ	18
トビ	3
ハヤブサ	1
ハシブトガラス	5
ツバメ	6
ウグイス	6
メジロ	4
ムクドリ	2
インヒヨドリ	1
スズメ	5



カンムリウミスズメ 撮影:西村 四郎

『倉田 篤は教師として四日市南高校に赴任中の1967年から紀伊長島周辺の鳥類を調査し、貴重な記録を残した。残念ながら、調査中の不慮の調査船転覆事故により1970年4月27日に若くして死亡している。紀伊長島周辺の海鳥調査の主要な部分は「三重生物」に掲載された論文、熊野灘沿岸の鳥類（倉田 1968）と彼の死後1971年に出版された「紀伊長島の鳥類」にまとめられている（倉田 1971）。』

倉田氏が遭難されたとき、私は桑名高校2年生でした。生物部に所属し、毎日放課後は生物室や準備室へ行っていました。おそらく、倉田氏が亡くなったことは、生物部顧問の先生が話されたと思うのですが、記憶には残っていません。その後、私も生物学を勉強して高校教員となりました。そして、私も四日市南高校へ1987年から2000年までの13年勤めました。生物準備室で倉田氏の使っていたカウンターや双眼鏡などを目にしました。



カンムリウミスズメの群れ 撮影：沢本 浩志

1993年に、私の住む多度町（現在は桑名市）で町史の自然編を作るので手伝ってほしいと、町職員である中学高校の後輩から頼まれました。最初の会議で、鳥類を調べるものがないから担当してくれといわれ、鳥類とのかかわりが始まりました。2022年になり、三重県でレッドデータの改訂を行うので調査をすることになりました。

倉田氏と私は何のかかわりもなく、お会いすることもなかったのですが、不思議な縁を感じます。今回紀北町を訪れ、赤野島にある慰靈碑「海鳥の碑」に船の上から手を合わせることができました。



鈴鹿市、入道ヶ岳

志摩市 濱屋 勝則

2023年3月4日（土曜日）晴れのち曇り

【ルートと経路】

7:30 樁大神社登山者専用第2駐車場を出発
7:50 井戸谷登山口より登山開始
9:45 北の頭通過
10:00 樁大神社の奥社到着
11:00 入道ヶ岳山頂到着

11:15 二本松尾根を下山
12:40 登山口到着

【山歩きの中で鳴き声や姿を見られた野鳥】

キジバト、トビ、コゲラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、メジロ、ミソサザイ、スズメ、イカル 計13種



フクジュソウ

入道ヶ岳では3月の上旬頃に福寿草が咲き始めます。まさに春告げ花と言っても良いのでは。雪の溶けるのが遅い年などはその雪の下から蕾を覗かせ少しづつ開き可愛い花を咲かせます。元気を分けてくれそうな黄色い花を見ようと、たくさんの登山者が訪れる人気の山でもあります。また、山頂からは360度素晴らしい景色がパノラマで眺められ鈴鹿の山々が一望できます。

猪名部神社 アオバズクの記録



四日市市 三曾田 明

毎年、猪名部神社（後述のコラム参照）のアオバズクの便りが誰かしらから届きます。が、私自身はカメラマンが集まる場所を避けているので、これまで興味はあったものの出向くことはありませんでした。そんなおり、「神社の宮司さんが記録を取っているらしい」という話を聞き、それならばぜひ、記録を公のものとして、かつ後世に残してあげたいと思い、話を伺ってきました。

猪名部神社の宮司は石垣光磨さんという方で、先代の宮司より引き継いで長年に渡りアオバズクを見守っているとのことでした。神社に関わることを始め、諸々のことを手帳にメモとして残しているとのことで、さすがに手帳そのものを公開したり預かったりはできないので、そこから「初認（初鳴き）、終認、生まれた雛の数、巣立った雛の数」を書き出してもらいました（表1）。面倒な作業にもかかわらず、快く引き受けただけましたこと、この場を借りてお礼申し上げます。

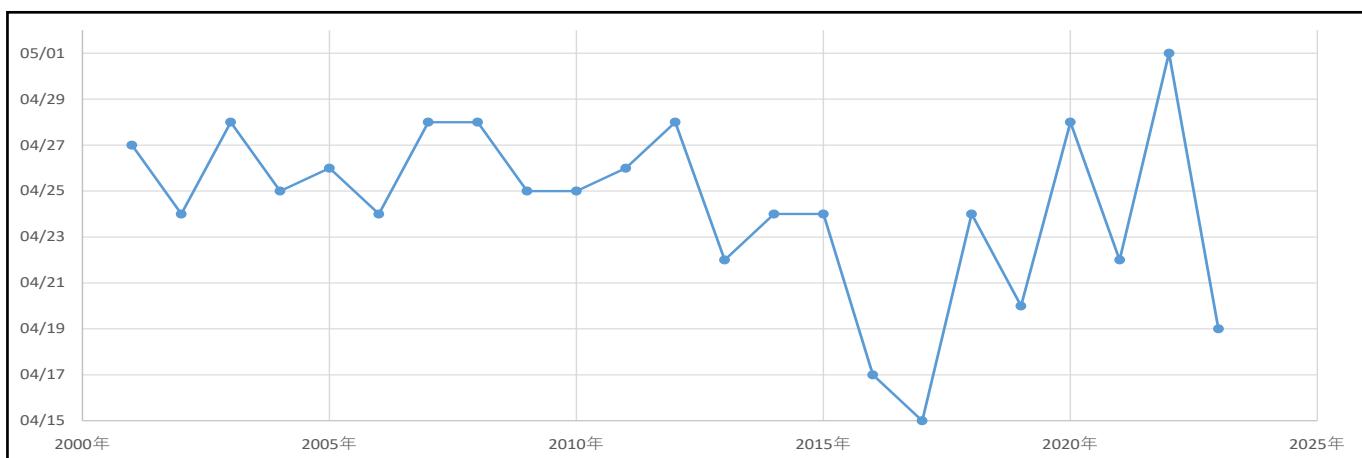


2016/7/7 子育て中の親鳥 写真： 笹間 俊秋

表1 猪名部神社アオバズクの記録

年	初認	終認	生まれた雛の数	巣立った雛の数	巣立った日	脚注
2001	4/27	9/26	3	3	7/10,12	
2002	4/24	9/24	3	3	7/11,14	
2003	4/28	9/25	3	3	7/13,15,16	
2004	4/25	9/28	3	3	7/10,14	
2005	4/26	10/2	3	3	7/15,16	1
2006	4/24	9/28	3	3	7/10,11	
2007	4/28	10/3	3	3	7/10,13	
2008	4/28	10/3	3	3	7/14,15	
2009	4/25	9/12	3	3	7/11,13,16	
2010	4/25	9/29	3	3	7/12,14	
2011	4/26	10/2	3	3	7/15	
2012	4/28	9/19	3	3	7/13	
2013	4/22	10/3	3	3	7/12	
2014	4/24	9/30	3	3	7/15,16	
2015	4/24	9/22	3	3	7/21,26,27	2
2016	4/17	10/2	3	3	7/16,17,19	
2017	4/15	9/30	4	4	7/17,20	
2018	4/24	9/6	3	0	-	3
2019	4/20	9/28	4	4	7/18	
2020	4/28	9/24	4	4	7/16,17,18,19	
2021	4/22	9/20	4	4	7/16,19	
2022	5/1	10/7	4	4	7/14	
2023	4/19					

図 猪名部神社 アオバズクの初鳴き





現在営巣に使われている樹洞（クロガネモチの木）



集落の中の小さな杜。ここを目指して毎年アオバズクがやってくる。

脚注

1. セントレアが開港(2005/2/7)後、営巣木が変わった。
クスノキ→クロガネモチ
2. 2015/6/11 雛をヘビが襲おうとしたが、親鳥がヘビを掴んで、集まっていたカメラマンのそばに叩きつけた。
3. 2018/7/6 カラスに巣を襲われて、雛は全滅。

長い間にはいろいろなエピソードがあり、それを話していただいたので、そのうちのいくつかを表1の脚注として記載しました。本当はそのシーンを見た人ならではの臨場感のある語りだったのですが、ここでは素っ気無い表現になってしまったことをご了承ください。この他にも、「雛には主にセミを食べさせている。」「何年か前に巣の手前の枝が何者かに切られた。その年、雛が巣立ちに失敗し、落鳥した。雛はその後、人の手で枝へ戻されたが、その後どうなったかは不明。」など興味深い話もありました。

図1は、初認をグラフ化したものです。2016年以降の初認の時期の乱れが気になり、これにアオバ

ズクの越冬地付近データの取りやすいシンガポールやジャカルタの3月や4月の平均気温のグラフを重ねてみたりと試行錯誤していたのですが、特に因果関係はみられませんでした。何か原因があると思われますが今のところ不明です。

アオバズクという観察情報が少ない鳥の、長い年月の記録はとても貴重です。これまでの継続な観察に敬意を払うとともに、これまで通り毎年アオバズクがやってきて、この観察が途絶えることがないよう願うばかりです。

注意とお願い

通常、営巣場所は伏せるようにしています。それは、そこに集まってくるカメラマンなどが営巣に悪影響を及ぼすからです。しかし、猪名部神社のアオバズクは神社のホームページの他、東員町の広報でもよく掲載されており、比較的よく知られている存在ということもあり、この記事では例外的に掲載しました。

かといって、みんなで押し寄せて良いというわけではありません、猪名部神社のアオバズクを直接見たり写真を撮ったりしたい思った方もいらっしゃると思いますが、ぜひ自重してください。

猪名部神について

猪名部神社は三重県員弁郡東員町にある神社。創建時代は不明だが延喜式内社（延長5年（927年）にまとめられた全国の神社一覧（2861社））に記載された歴史ある古社で、員弁の始祖・伊香我色男命（いかがしこのみこと）を主神とし、『学問の神』として「続日本後記」を著された春澄善縄（はるすみのよしただ・員弁郡出身）が祀られている。

毎年4月の第1土曜日・日曜日の2日間に渡るお祭りの猪名部神社大祭（大社祭）は、「上げ馬」、「流鏑馬」の両神事が奉納され、多くの見物客で賑わう。上げ馬神事は鎌倉時代の建久3年（1192年）に始まったと伝えられる稻作の吉凶を占う東員町の特殊神事で、2002年（H14）に県の無形民俗文化

財に指定された。

上げ馬神事は全国的にも2か所しかなく、もう一つは多度大社で、そちらは猪名部神社大祭よりも後の南北朝時代の暦応年間（1338年～1341年）にこのあたりを分領する武家の中より始まったとされているが、織田信長の兵火にあい社記は残っておらず、どのように始まりをみせたのかは分かっていない。



シギ・チドリ類の年齢・季節による羽衣の変化

—連載第32回 ソリハシセイタカシギとレンカク—



津市 今井 光昌

ソリハシセイタカシギ

日本で見られるセイタカシギ科の鳥はセイタカシギとソリハシセイタカシギの2種です。セイタカシギは旅鳥または留鳥で、三重県では繁殖例もあり1年中見られます。ソリハシセイタカシギは日本に旅鳥、冬鳥として渡来しますが、渡来数は多くはありません。三重県では2010年以降、10個体を観察しましたが、1羽での渡来が普通で、2羽と3羽の渡来が各々一度あるだけでした。

ソリハシセイタカシギもセイタカシギと同様に他種との識別は容易ですが、両種の識別も容易です。ソリハシセイタカシギはセイタカシギより体がやや大きいですが、足はセイタカシギより短く、青灰色です。嘴は細くて長く、先端部分が上方に大きく反っています。ソリハシセイタカシギには小さな

後趾がありますが、セイタカシギに後趾はありません。頭部から頸、肩羽と体の側面、初列雨覆の先端部分が黒いため、飛翔時にはこれらの黒色部分がよく目立ちます。なお、セイタカシギが泳いでいるのを見ることはまずありませんが、ソリハシセイタカシギはよく泳ぎます。ソリハシセイタカシギ♂成鳥の虹彩は赤褐色で、♀成鳥の虹彩は茶褐色なのですが、ケリのように虹彩の色が明瞭に出る写真撮影は難しく、雌雄の虹彩の色まではっきりと分かる写真が撮れていません。

ソリハシセイタカシギの採餌方法は上方に反った嘴を水中に入れ、歩きながら大きく嘴を左右に振って餌を捕食することが多いです。

ソリハシセイタカシギとセイタカシギ



図1ソリハシセイタカシギとセイタカシギ
2010.04.17



図2ソリハシセイタカシギとセイタカシギ
2010.04.17

図1～2の右上はセイタカシギ（成鳥夏羽）です。手前のソリハシセイタカシギは、褐色の幼羽が残る第1回夏羽です。セイタカシギ成鳥は背と翼が黒く、幼鳥の体上面は褐色味が強いです。セイタカシギの頭部から後頸の黒斑は、黒斑模様が様々で個体差が大きく、頭部から後頸に黒斑のない真っ白な

個体もいます。一方、ソリハシセイタカシギは頭上から後頸が黒く、肩羽、雨覆の一部、初列風切も黒色ですが、黒色部以外は真っ白です。同じセイタカシギ科で名前はソリハシがあるかないかの違いだけですが、羽模様の違いは一目瞭然です。

ソリハシセイタカシギ 翼上面と下面



図3 ソリハシセイタカシギ 第1回冬羽と成鳥冬羽

2021.01.13

図3～4 羽のソリハシセイタカシギの内、左の1羽は黒色部が褐色味の強い1年目の若鳥で、右側の2羽は成鳥です。若鳥は翼の上面も下面も褐色で、他の成鳥2羽とは明らかに違っています。夏羽と冬



図4 ソリハシセイタカシギ 第1回冬羽と成鳥冬羽

2021.01.10

羽が酷似しているソリハシセイタカシギですが、撮影日が1月10日の夏羽は時期的に考えられず、第1回冬羽です。

ソリハシセイタカシギ 採餌



図5 ソリハシセイタカシギ



図6 ソリハシセイタカシギ



図7 ソリハシセイタカシギ

ソリハシセイタカシギは先端部分が上方に湾曲した長い嘴を水中に入れ、歩きながら嘴を左右に振り魚類や甲殻類を捕食します（図5～7）。嘴がしゃもじ型のヘラサギやクロツラヘラサギも水深の浅い干潟の淵などで同様な採餌をしますが、ソリハシセイタカシギは細い嘴が上に反っています。嘴が細い上に、上方に湾曲した嘴で触れたものを捕まえるのですが、動く魚をよく捕まえられるものです（図8）。



図8 ソリハシセイタカシギ

ソリハシセイタカシギ 雌雄

ソリハシセイタカシギは雌雄がよく似ています。♂は虹彩が赤褐色で、♀の虹彩は茶褐色です。図9～10では虹彩の色がはっきりとは出でていませ

んが、♀の方が嘴の反りが強いと言うこともあります。図9は♂、図10は♀と識別できそうです。



図9 ソリハシセイタカシギ♂



図10 ソリハシセイタカシギ♀

ソリハシセイタカシギとセイタカシギ 足の形状



図11 ソリハシセイタカシギ
水かきがある



図12 ソリハシセイタカシギ
小さな後趾がある



図13 セイタカシギ
水かきも後趾もない

ソリハシセイタカシギは趾の間に水かきが発達しています（図11）。小さな後趾もあります（図12）。セイタカシギには水かきも後趾もありません

（図13）。よく泳ぐソリハシセイタカシギと泳がないセイタカシギは水かきの発達具合からも分かります。

ソリハシセイタカシギ 第1回冬羽



図14 ソリハシセイタカシギ 第1回冬羽
2019.12.12



図15 ソリハシセイタカシギ 第1回冬羽
2019.12.12

これまでにソリハシセイタカシギを三重県で観察できたのは11月23日が最も早く、幼羽が新鮮で擦れがない9月頃の幼鳥との出会いはまだありません。図14と15は同一個体です。撮影日が12月

12日なので第1回冬羽に換羽中か、第1回冬羽に換羽した個体です。肩羽、雨覆、初列風切に褐色の幼羽が残っています。

ソリハシセイタカシギ 第1回夏羽



図 16 ソリハシセイタカシギ 第1回夏羽
2012.05.22



図 17 ソリハシセイタカシギ 第1回夏羽
2012.05.22

図 16～17 のソリハシセイタカシギは、上面の黒色部に残る褐色の羽は成鳥羽でなく、擦れ具合か

らも幼羽と思われ、5月22日と言う日付から第1回夏羽と判断してよさそうです。

ソリハシセイタカシギ 成鳥冬羽



図 18 ソリハシセイタカシギ 成鳥冬羽
2014.12.23



図 19 ソリハシセイタカシギ 成鳥冬羽
2014.12.23

ソリハシセイタカシギは頸を左右に振る採餌だけでなく、土の中に嘴を突っ込み、潜っている虫類や甲殻類も採餌します（図 18）。成鳥は肩羽・雨覆・初列風切の黒色部が明瞭です（図 19）。ソリハシセイタカシギは泳ぐのが得意で、よく泳いでいます（図 20）。図 18、19、20 は同じ個体です。黒色部に褐色部分が殆どなく成鳥冬羽です。一方、セイタカシギは嘴が真っすぐで、成鳥は足が赤く、背や翼に白色部はありません。



図 20 ソリハシセイタカシギ 成鳥冬羽
2014.12.23

レンカク

レンカクは南方系の鳥で、日本には迷鳥として春秋の渡りの時期に渡来します。頸が細くて長いスマートな体形で、足指も非常に長いです。後述のように長い足指は湖沼や湿地でハスや睡蓮などの浮き草の上を自由に歩くのに適しています。水草を主な主食とし、昆虫、甲殻類なども食べます。レンカ

ク夏羽は顔から頸が白く後頸は金色が目立ち、背と腹、及び非常に長い尾羽は黒色です。翼は白く初列風切の外側と先端が黒いです。冬羽は背面が褐色で腹面は白く、眼から頸の側面を通る黒い帯は胸に達します。冬羽は尾羽が短いです。

レンカク成鳥夏羽（6月）



図 21 レンカク 成鳥夏羽 2006.06.24



図 22 レンカク 成鳥夏羽 2006.06.24

図 21、22 のレンカクを観察した時、多数の人間が居並ぶ前に飛んで来て採餌もする、警戒心の薄い鳥でした。思っていたより大きいなーと思いましたが、その 3 年後に幼鳥を観察した時、レンカクってこんなに小さかったのかと思いました。3 年を経ているので大きさまで明確に覚えている訳ではありませんが、成鳥と幼鳥の尾羽の長さの違いで、ある

いは雌雄の差で、そう思ったのかも知れません。レンカクは♀の方が大きいので、当のレンカクは成鳥♀だったのではないかとも思いました。レンカクは一夫多妻で、♂が抱卵・育雛する雌雄の役割が逆転している鳥です。繁殖後の換羽ではカモの換羽のように羽が一度に全部抜け落ち飛べなくなるようです。

レンカク 第1回冬羽（10月）

幼鳥は頭頂が赤褐色、虹彩が黄色です。図 23,24 は同じ個体で、上面に淡褐色の羽と、褐色の羽見えます。淡褐色の羽は幼羽で、褐色の羽は冬羽です。成鳥冬羽と第 1 回冬羽は似ていますが、成鳥冬羽の

頭頂は黒褐色、虹彩は暗褐色です。レンカクは水生植物の根や茎、昆虫や甲殻類を食べるようですが、図の個体は水際の草の実（イネ科の植物）もよく食べていました。



図 23 レンカク 第1回冬羽 2009.10.20



図 24 レンカク 第1回冬羽 2009.10.20

レンカク 幼鳥(10月)



図 25 レンカク 幼鳥 2019.10.06



図 26 レンカク 幼鳥 2019.10.08

レンカクは足指と爪がとても長いです。ハスなどの水生植物の葉の上を歩き回り、採餌する為に長い足指と爪が要るのです。図 25 は睡蓮の葉の上を歩くレンカクです。羽を広げると上・下面とも白い翼が際立ちます。図 25、26、27 は同じ個体で、幼羽から第 1 回冬羽に換羽初期の段階です。頭頂が赤褐色で虹彩が淡黄色、幼鳥は雨覆にサブターミナルバンドがあります。



図 27 レンカク 幼鳥 2019.10.08

最後に

野鳥の写真を撮るときは後での識別の事を思い、その種の特徴的な部分を撮るように心がけていますが、思ったように撮れていないことが多いです。今回、虹彩の色が鮮明に出ているソリハシセイタカ

シギの写真はないかと、保存してある画像を調べ直しましたが、ありませんでした。識別力の向上だけでなく、撮影技術の向上も意識していく必要があると思いました。

野鳥記録 (2023年2月3日から2023年4月20日までに報告があったもの)



鳥の種類名	個体数	観察日	観察場所	雄 / 雌 / などの 差別	記録報告者 氏名	脚 注
サンショウクイ (亜種リュウキュウサンショウクイ)	1	2022/10/28	津市久居明神町		前田 聰	1
ソリハシセイタカシギ	27	2023/01/21	三重県北勢地方		今西 純一	2
トラツグミ	1	2023/01/31	津市		前田 聰	3
シノリガモ	8	2023/02/03	伊勢市 宮川河口		西村 四郎	4
アカエリカイツブリ	2	2023/02/03	伊勢市 宮川河口		西村 四郎	5
ツバメ	3	2023/02/04	四日市市 三滝川		谷口 広吉	6
ヘラサギ	1	2023/02/04	四日市市 鈴鹿川河口		岡崎 かおり	7
ヒメウ	1	2023/02/09	四日市市 鈴鹿川河口		横山 真一	8
ヘラサギ	1	2023/02/11	四日市市 鈴鹿川河口		市橋 靖	9
ミコアイサ	7	2023/02/12	いなべ市 両ヶ池	雄 4羽、雌 3羽	入船 真一	10
コハクチョウ	8	2023/02/14	鈴鹿市郡山町	成鳥 6羽 幼鳥 2	宮本 英子	11
キレンジャク	1	2023/02/16	松阪市 阪内川		中村 真理子	12
ヒメウ	1	2023/02/18	鳥羽市 鳥羽水族館屋上		市橋 靖	13
モズ (白化個体)	1	2023/02/18	三滝川		入船 真一	14
アリスイ	1	2023/02/24	三滝川		今西 純一	15
キレンジャク	6	2023/02/25	三滝川		入船 真一	16
キバシリ	1	2023/03/09	松阪市 堀坂山		中村 真理子	17
オオジュリン	1	2023/03/11	御浜町志原		沢本 浩志	18
オシドリ	1	2023/03/11	紀宝町 相野谷川	雄	沢本 浩志	19
ツバメ	1	2023/03/13	御浜町下市木		沢本 浩志	20
イワツバメ	6	2023/03/13	御浜町下市木		沢本 浩志	21
アリスイ	1	2023/03/15	松阪市 阪内川		中村 真理子	22
ヒクイナ	1	2023/03/15	松阪市 阪内川		中村 真理子	23
ヤツガシラ	1	2023/03/19	伊勢市		濱屋 勝則	24
カンムリカイツブリ	2	2023/03/21	鈴鹿市		今西 純一	25
ハクセキレイ	1	2023/03/21	鈴鹿市		今西 純一	26
オオセッカ	1	2023/03/25	御浜町市木川		沢本 浩志	27
アカハラ	1	2023/04/02	四日市市 垂坂公園	雄	今西 純一	28
タマシギ	2	2023/04/03	紀宝町大里	雄、雌	沢本 浩志	29
アトリ	5	2023/04/06	菰野町 三重県民の森		入船 真一	30
コチドリ	20	2023/04/10	御浜町志原		沢本 浩志	31
アマツバメ	50	2023/04/11	御浜町下市木		沢本 浩志	32
コサメビタキ	1	2023/04/16	四日市市 垂坂公園		今西 純一	33
イカル	1	2023/04/16	四日市市 垂坂公園		今西 純一	34
キビタキ	1	2023/04/16	四日市市大矢知	雄	今西 純一	35
キビタキ	1	2023/04/20	四日市市 垂坂公園		今西 純一	36
サンショウクイ	1	2023/04/20	四日市市 垂坂公園		今西 純一	37
エゾムシクイ	1	2023/04/20	四日市市 垂坂公園		今西 純一	38

脚注

1. 報告済みと判断していたが、当時報告した記憶が明らかでないので、今回送信した。
2. 本号 別記事参照
3. 今季初認。同所で2月7日にも確認。同じ個体かは不明。
4. 1月中旬から来ているみたい。
5. ほぼ毎年見る。
6. 季節はずれの出現でした。
8. ヒメウが何年で成鳥になるのか調べがつきません。今回は若鳥として報告する。
11. 終認。概ね午前10時～11時頃南東方向より飛来して、午後3時～4時頃南東方向に飛び去るの繰り返し。
15. ベニマシコ、ホオジロ、アオジと混じっていた。
17. 針葉樹林にいた。
22. 去年も越冬していた。今年は河川敷の木が切られ、場所が少しずれていた。
23. 本期初認。
25. 求愛のダンスが見られた。
26. 過眼線がほぼない個体。ホオジロハクセキレイに近いか、亜種ハクセキレイやタイワンハクセキレイに近いようにも思える。混血かもしない。また、白化の可能性もある。
27. 藪の中で鳴いていましたので、スマホで鳴き声を鳴らすと藪から出てきて、すぐに葦原の方に飛んでった。すばしっこくて、撮影できなかった。
28. 頭が黒く目の周りが白く、昨年と同じ個体と思われる。昨年も4/2に初認。4月中旬まで滞在した。
29. 田んぼの真ん中で巣を作成中。
31. 田んぼに複数の個体を確認。
32. 田んぼの上をかなりの数のアマツバメが舞っていた。イワツバメとツバメが混じっていた。
33. 初認。
35. 初認。小さな声で3回さえずった。
36. 垂坂公園での初認。声だけを聞いた。
37. 垂坂公園での初認。鳴きながら上空を飛んでいた。姿は見えず。
38. 垂坂公園での初認。盛んにさえずっていた。

(脚注は投稿者の記述のうち、記録として必要な情報にかぎり掲載しています = 編集部)



ヘラサギ：岡崎 かおり



アトリ：入船 真一



アカエリカイツブリ：西村 四郎



アマツバメ：沢本 浩志



ヒメウ：横山 真一



ヘラサギ：市橋 靖



ヤツガシラ：濱屋 勝則



トラツグミ：前田 聰



カンムリカイツブリ：今西 純一



キレンジャク：中村 真理子



ツバメ：谷口 広吉



コハクチョウ：宮本 英子



タマシギ：沢本 浩志



シノリガモ：西村 四郎

理事会報告



2023年3月25日(土) 津市安濃中公民館

出席:8名 欠席:5名

【協議事項】

1. 探鳥会名簿の文言見直し

性別欄 削除、保険以外の利用について野鳥の会本部の文言を利用して追加する。

2. おためし会員募集資料 わかりにくい=事務局案を当面利用する。

3. ツバメの子育て応援事業 表彰者候補:「大紀町 釣りエサ店舗」積極的に保護している。

4. 総会および来期の体制 来期の体制 理事に1名追加 1名退任 予定

研究部:代表が部長を兼任 部員1名 監査:1名交代

5. 総会の準備

文書作成(文書は出席者に渡す=会員全員には送付しない=了承された)

会報には総会終了後、会計表と簡単な著述を掲載する。総会案内は別送する。

6. 決算と予算

決算見込み及び予算案が了承された。予算にチュウヒサミット約10万円に入る。

委託業務についての現在の保険は高い。年間加入の保険を調べる。

7. カワウ調査の体制

研究部へ移行する。できるだけメールで報告するようにしてもらう。

8. 宿泊探鳥会の準備

近畿トラベル株式会社 行き先:長野県戸隠 日程:6月9日~10日(1泊2日)

場合によっては会からの補助も検討する。

9. 津城址再建問題 回廊と櫓を再建するという動きあり。

10. 木曽岬アセス、開発の現状

アセス、現在準備書を作っている。

チュウヒサミットを開催する方向で検討する。アセスの進展とは切り離して考える。

【報告事項】

1. 各地区的現状

2. レッドデータ会議

3. ガンカモ調査 2023年:205か所調査。新調査員:2名 新システムが機能した。

現在はガンカモ調査地情報(観察地点の情報)を集めている。

4. 大島ドブネズミ対策

5. フクロウ類保護

現在までに9個の巣箱かけを行った。昨年までに3個利用実績、今春新たに1個利用あり。

※訂正:「しろちどり 115号 20p」の理事会報告で下記のとおり訂正します。

誤:欠席2名 ⇒ 正:欠席3名

事務局だより

活動の記録(2023年2月~3月)

- | | |
|----------|---------------------------------|
| 2/12 | 「NPO 法人 大杉谷自然学校」主催の野鳥観察会に協力(4名) |
| 3/13 | 会報誌「しろちどり第116号」発行・発送作業 |
| 3/25 | 理事会 津市安濃中公民館 |
| 3/1~3/14 | 県委託「令和4年カワウねぐらコロニー調査」実施 |
| 3月 | 決算作業 |

探鳥会予告（2023年7月～10月）



● 7月 2日(日) 足見川探鳥会

開催地 / 四日市市山田町 足見川

集 合 / 10:00 山田町 足見川「きたがわ橋」前

● 7月 23日(日) 木曽岬干拓地探鳥会 雨天決行！

開催地 / 愛知県弥富市 鍋田干拓地・木曽岬干拓地

集 合 / 9:00 愛知県 弥富野鳥園

● 8月 5日(土) 御在所岳探鳥会

開催地 / 茷野町 御在所岳

集 合 / 9:00 御在所ロープウェイ湯の山温泉駅

● 8月 27日(日) 木曽岬干拓地探鳥会 雨天決行！

(詳細は 7月 23日と同じ)

● 9月 12日(火) 海蔵川で鳥見 ing!

(バードウォッ칭) その 2 小雨決行！

開催地 / 四日市市西坂部町 海蔵川沿い

集 合 / 9:45 海蔵川代官橋 北詰

● 9月 16日(土) 五主探鳥会 小雨決行！

開催地 / 松阪市 五主海岸

集 合 / 10:00 雲出川右岸堤防河口 五主海岸コーナー

● 9月 23日(土) (祝) 庭田山タカ渡り探鳥会

開催地 / 海津市 庭田山頂公園

集 合 / 10:00 庭田山頂公園駐車場

● 9月 24日(日) 木曽岬干拓地探鳥会 雨天決行！

(詳細は 7月 23日と同じ)

● 9月 30日(土)、10月 1日(日) 伊勢タカ渡り探鳥会

開催地 / 伊勢市 やすらぎ公園

集 合 / 7:30 やすらぎ公園 納骨堂前

● 10月 1日(日) みつえ高原牧場タカ渡り探鳥会 小雨決行！

開催地 / 奈良県宇陀郡御杖村菅野 みつえ高原牧場

集 合 / 8:00 近鉄名張駅 西口前

備 考 / 参加予約必要

探鳥会報告（2023年1月～2023年3月）



●大淀海岸探鳥会

2023年1月 29日(日) 9:30～11:30

多気郡明和町 大淀海岸周辺

中村悦子 参加者 18名 (会員 17名)

ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、コガモ、ホシハジロ、カンムリカツブリ、ハジロカツブリ、キジバト、カワウ、オオバン、シロチドリ、ミュビシギ、ユリカモメ、カモメ、セグロカモメ、ミサゴ、トビ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒヨドリ、メジロ、ムクドリ、シロハラ、ツグミ、ジョウビタキ、イソヒヨドリ、スズメ、ハクセキレイ、ビンズイ、カワラヒワ、ホオジロ、アオジ、ヒメウ、ドバト 計 35種

寒いときですが、風もなくよいお天気に恵まれました。漁港ではハジロカツブリがいて、海岸のテトラにはヒメウとカモメが黒・白でわかりやすく並んでいました。シロチドリも海岸線に来てくれました。個体数は少なめでしたが、35種を観察できました。

●明神・神戸の里山林道探鳥会

2023年2月 4日(土) 9:30～11:30

津市久居明神町 里山の林道

前田聰 岡八智子 参加者 25名 (会員 20名)

アオサギ、ミサゴ、トビ、ノスリ、コゲラ、サンショウウクイ、モズ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ムクドリ、シロハラ、ツグミ、ジョウビタキ、ビンズイ、カワラヒワ、ホオジロ、カシラダカ、アオジ、ソウシチョウ 計 25種

当日は、絶好の鳥見日和の天気に恵まれ、参加者総数 25名で探鳥会を開催することとなりました。

探鳥会の案内が初めてのリーダーの下で、その上、当該探鳥地の観察も、野鳥の会三重として初めての場所であり成果が心配されたが、野鳥の会三重の代表、事務局長をはじめ、ベテランのサブリーダーや事務局役員、多くの会員の協力により、無事探鳥会を終了することができました。

唯一、道中でサンショウウクイの鳴き声 (姿が確認できず、リュウキュウサンショウウクイかも という意見も・・・) が聞こえ、昨年 10月 28 日には同場所の林道広場でリュウキュウサンショウウクイの姿を観察しているので、今後も継続して同周辺での確認行動を行うこととしたい。

●深谷公園探鳥会（場所が変更になりました）

2023年2月5日（日）10:00~12:00

鈴鹿市 深谷公園

共催団体 / 鈴鹿市環境政策課

藤井英紀 市川美代子 参加者 27名（会員 3名）

ノスリ、コゲラ、モズ、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、メジロ、シロハラ、ジョウビタキ、ハクセキレイ、カワラヒワ、シメ 計 13種

市との共同開催であり家族で参加された方が多かったです。見られたのは 13 種類ですが、所々定点観測で小さなお子さんにも鳥を見てもらうことができました。最後にノスリが見られ、多くの人に猛禽類を身近に感じてもらうことができたと思います。

●五十鈴川周辺探鳥会

2023年2月12日（日）10:00~11:30

伊勢市浦田町 五十鈴公園

濱屋勝則 作田久春 参加者 22名（会員 19名）

ホシハジロ、コサギ、イソシギ、カワセミ、コゲラ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、メジロ、ヒレンジャク、ムクドリ、トラツグミ、シロハラ、ツグミ、ジョウビタキ、イソヒヨドリ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、イカル、アオジ、ドバト 計 26種

五十鈴川周辺と五十鈴公園は自身が野鳥観察や撮影にとよく通ったフィールドです。

今回はそのマイフィールドを舞台に探鳥会リーダーで案内する事ができました。冬の時期は、普段見られない野鳥の訪れを待ちわびながら足を運んでいますが、今回は近隣のフィールドにて確認されたヒレンジャク、トラツグミなどがタイミング良くコース内にて見られたので嬉しかったです。自身の喜びと同時に、初めて目にした参加者の方々との感激で、最後の鳥合わせの際に一同が楽しかった今日の探鳥会の感想を聞かせて頂き良かったです。

●三滝川かんさつ会

2023年2月18日（土）9:30~12:00

三重郡菰野町 三滝川河川敷

矢田栄史 鈴木健真 参加者 38名（会員 24名）

キジ、カイツブリ、キジバト、イカルチドリ、カワセミ、コゲラ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、イワツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、ムクドリ、シロハラ、ツグミ、ジョウビタキ、スズメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、シメ、イカル、ホオジロ、アオジ、オオジュリン 計 28種

川沿いの木の目立つところではホオジロが囁ったり、鳴き方は不完全ではありましたがキジのケンケーンも聞こえました。かんさつ会の目玉であった、風切りと尾羽の白いモズも皆さんでゆっくりと観察できました。また、ベニマシコも現れててくれて見ることができました。

●高松海岸探鳥会

2023年2月23日（木・祝）10:00~12:00

川越町 高松海岸

笹間俊秋 近藤義孝 参加者 15名（会員 13名）

ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、スズガモ、ウミアイサ、カンムリカイツブリ、キジバト、カワウ、アオサギ、ダイサギ、コサギ、オオバン、ミヤコドリ、イソシギ、ユリカモメ、カモメ、セグロカモメ、ミサゴ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ムクドリ、シロハラ、ツグミ、ジョウビタキ、スズメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ 計 35種

少し小雨が降っていましたが、探鳥には影響はありませんでした。河口にはボート遊びの人もいて、鳥たちは沖へ避難していましたが、潮が引いてくると徐々に戻ってきました。ミヤコドリは集団で浅瀬で餌を食べ始めたので、私たちが近いところへ行っても逃げなかったので、じっくりと観察することができました。

●木曽岬干拓地探鳥会

2023年2月26日(日) 9:00~12:00

愛知県弥富市 鍋田干拓地・木曽岬干拓地

共催団体 / 愛知県野鳥保護連絡協議会

近藤義孝 筒間俊秋 参加者 17名 (会員 17名)
オカヨシガモ (29)、マガモ (27)、カルガモ (30)、ハシビロガモ (22)、コガモ (54)、ホシハジロ (50)、キンクロハジロ (20)、カイツブリ (1)、カンムリカイツブリ (22)、カワウ (13)、アオサギ (5)、ダイサギ (40)、オオバン (12)、タゲリ (2)、イソシギ (1)、ユリカモメ (1)、ミサゴ (25)、トビ (2)、ハイタカ (4)、ノスリ (1)、カワセミ (1)、コチョウゲンボウ (12)、ハヤブサ (3)、モズ (1)、ハシボソガラス (1)、ハシブトガラス (57)、ヒバリ (5)、ヒヨドリ (10)、ウグイス (15)、メジロ (4)、ムクドリ (9)、ツグミ (2)、ジョウビタキ (12)、スズメ (1)、ハクセキレイ (22)、セグロセキレイ (1)、タヒバリ (7)、カワラヒワ (1)、ホオジロ (10)、カシラダカ (7)、アオジ (2)、ドバト (36) 計 42種

風が強くて寒い日でした。チュウヒとハイイロチュウヒが木曽岬干拓地内で観察できました。

●身近な冬鳥を観察しよう(安濃川河口)

2023年3月4日(土) 9:30~11:30

津市一身田上津部田・高洲町 三重県総合博物館・安濃川河口

共催団体 / 三重県総合博物館・三重県環境学習情報センター

平井正志 木村京子 参加者 24名 (会員 2名)

ヒドリガモ、マガモ、オナガガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ウミアイサ、カワウ、コサギ、ミヤコドリ、ユリカモメ、セグロカモメ、トビ、オオタカ、ハシボソガラス、ツグミ 計 15種

今回も参加希望者が多く、抽選で参加者を決めたとのこと。子供連れが多かった。博物館でカモ類、セグロカモメ、ハマシギ、ミサゴなどの剥製を見て、安濃川河口に来る鳥を予習し、現場に向かった。

幸い、風も穏やかで、春らしい陽気であった。ミヤコドリ、セグロカモメが多く、カモ類は少なかつたが、それでもマガモやホシハジロなど数種が見えた。ミヤコドリ以外のシギ類はいなかった。当会会員も数名が河口に来ており、子ども達には望遠鏡でミヤコドリやセグロカモメなどを見てもらった。

群れ飛ぶミヤコドリの鳴き声と、子ども達の笑顔が印象に残る探鳥会であった。

●石垣池探鳥会

2023年3月5日(日) 10:00~11:30

鈴鹿市石垣3丁目 石垣池

市川美代子 藤井英紀 参加者 7名 (会員 4名)

ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、コガモ、カンムリカイツブリ、キジバト、カワウ、アオサギ、オオバン、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ムクドリ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ 計 15種

7名でじっくりとカモなどを見ることができました。会員外の方々、楽しんでいただけたかな?

●海蔵川で鳥見 ing!(バードウォッチング)その6

2023年3月7日(火) 9:45~12:00

四日市市西坂部町 海蔵川沿い

筒間俊秋 参加者 8名 (会員 5名)

オカヨシガモ、マガモ、カルガモ、コガモ、ホシハジロ、カイツブリ、キジバト、ダイサギ、バン、オオバン、ケリ、トビ、ノスリ、カワセミ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ウグイス、ムクドリ、ツグミ、ジョウビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ、アオジ、ドバト 計 28種

良く晴れて風も無く春の陽気となりました。ホオジロやウグイスの囀りも聞かれ、カワセミも雌のところへ雄が何度もアプローチへ行っていました。カラスも巣材を持って木の中へ運び込んでいました。春の訪れを感じられる探鳥会となりました。

●阪内川探鳥会

2023年3月19日(日) 9:30~11:00

松阪市外五曲町

中村真理子 中村洋子 参加者 17名 (会員 16名)

オカヨシガモ、マガモ、カルガモ、コガモ、キジバト、コチドリ、クサシギ、トビ、ハイタカ、アリスイ、ハヤブサ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、ムクドリ、シロハラ、ジョウビタキ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、アオジ 計 26種

初めての企画でしたが、集合地からの移動もスムーズで、皆さん終始楽しく鳥見できたと思います。観察地は市街地の真ん中に位置し、人為的な影響が受けやすい場所のため、堰の上げ下げや木の伐採等で、見られる鳥はその時の環境でかなり変わります。アリスイの位置も去年から少しづれていきましたが、観察することができました。人間の生活の場のすぐ近くに、普段あまり見られないような種が観察できることも驚きだったのではと思います。

●宮リバー公園探鳥会

2023年3月19日(日) 9:00~11:00

度会郡度会町 宮リバ一度会パーク

西村 泉 濱屋勝則 参加者 25名(会員9名)

カルガモ、カワアイサ、アオサギ、ダイサギ、トビ、ノスリ、コゲラ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ツグミ、イソヒヨドリ、スズメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ、アオジ 計 23種

晴天になり桜も咲いて春らしい日になりました。ここ3年ほどコロナ禍でまともに開催できませんでしたが、ようやく一般の方や家族連れが参加されて賑やかな探鳥会になりました。例年、30種以上観察できますが、今回はやや少なめの23種。普通種ばかりでしたが、子ども達や初心者が多かったので、カラ類などがすぐ近くで観察でき大変喜んでいただけました。

●木曽岬干拓地探鳥会

2023年3月26日(日) 9:00~12:00

愛知県弥富市 鍋田干拓地・木曽岬干拓地

共催団体 / 愛知県野鳥保護連絡協議会

近藤義孝 笹間俊秋 参加者 10名(会員10名)

オカヨシガモ(1)、ヨシガモ(2)、マガモ(26)、カルガモ(31)、ハシビロガモ(5)、コガモ(50)、ホシハジロ(28)、キンクロハジロ(7)、カツツブリ(1)、カンムリカツツブリ(4)、キジバト(4)、カワウ(40)、アオサギ(5)、ダイサギ(2)、オオバン(34)、ケリ(10)、コチドリ(3)、タシギ(1)、クサシギ(3)、イソシギ(1)、カモメ(1)、ミサゴ(1)、トビ(2)、モズ(1)、ハシボソガラス(25)、ハシブトガラス(6)、ヒバリ(8)、ツバメ(1)、ヒヨドリ(22)、ウグイス(2)、ムクドリ(10)、ツグミ(180)、ジョウビタキ(1)、イソヒヨドリ(1)、スズメ(80)、ハクセキレイ(10)、タヒバリ(2)、カワラヒワ(1)、ホオジロ(2)、アオジ(1)、ドバト(63) 計 41種

雨が強く降っていました。冬鳥がまだ残っていました。木曽岬干拓地のチュウヒは観察できませんでしたが、この探鳥会31年目のスタートとなりました。

~使わなくなった望遠鏡をゆずってください!~

ガンカモ調査の研修用として活用したいので、不要になった望遠鏡(スコープ)がありましたら会へ寄付していただけませんか? 古くても構いませんが、修理が必要なものはご遠慮ください。

ご提供できる方は、下記事務局まで連絡をお願いします。
(事務局)

tel: 090-1566-6010

mail: pipitto.321@gmail.com

編集後記

この春、ようやく行動制限が解除されて自由に旅行ができるようになった。早速、何処かへ鳥見に行こうと計画したが、宿泊先・飛行機・レンタカーなどどれも予約がいっぱい計画した日時でとることが困難だ。しかもコロナ前から値段が高くなり旅費もばかにならない状態。しばらく落ち着くまで地元での鳥見に専念することとなりそうである。

今回の会報誌は大幅増量で32ページとなった。地元の鳥の話題も豊富なので是時バードウォッチングの参考にしていただきたい。

(T.S.)

しろちどり 117号

2023年6月1日発行

題字: 濱田 稔

表紙絵: 平井 正志

カット: 平井 正志

編集: 平井 正志・笹間 俊秋・三曾田 明

発行所: 日本野鳥の会三重

平井 正志 方

〒514-2325 津市安濃町田端上野 910-49

ホームページ <http://miebird.org/>

印刷: 株式会社プリントパック

〒617-0003 京都府向日市